追手門学院大学社会学部紀要
2010年３月29日，第４号，103-120

カント・ユクスキュル・ハイデガー（１）

山　本　博　史

Kant, Uexküll, Heidegger

Hiroshi YAMAMOTO

要　約

本論文は、ユクスキュルの環境世界論およびハイデガーの『形而上学の根本概念。世界－有限性 - 孤独』の中の三つのテーゼから、カントを逆照射することを目標とする論考「カント・ユクスキュル・ハイデガー」の第一章「カントにおける《存在の連鎖》という問題」である。

カントは、神・天使（もしくは霊）・人間・動物・植物・鉱物という宇宙論的階梯を提示しているが、そこには鉱物界から植物界への、さらには動物界への「移行（ein Übergang）」という問題が同時に提起されている。この「移行」の問題を、アリストテレスにおける「移行（μετάβασις）」の問題と比較考察することを通じて、また、カントの動物観をアリストテレスのそれと比較考察することを通じて、まず、カントにおける「移行」の問題が、生態学的・生理学的類縁性の問題であるだけでなく、生命の度合いという観点からの連続性の問題であることが明らかにされる。

次に、生命という観点からの《存在の連鎖》は、現象の系列における悟性綜合の無際限な連続性という意味での《存在の連鎖》とは異なることが示されたうえで、いくつかの問題点は残るものの、神・天使（もしくは霊）・人間・動物・植物・鉱物という宇宙論的階梯を、生命という観点から、精神的生命・人間的生命・動物的生命・植物的生命・生命なきものという《存在の連鎖》として捉えることが可能であることが、明らかにされる。

キーワード：存在の連鎖、生命、カントの動物観、カントの植物観

はじめに

以下において、まずは主としてカントの動物観が主題化されるが、その意図を明らかにしておきたい。動物に関する義務について語るカントの義務論の可能性を、動物解放論あるいは動物権利論という応用倫理学的な思潮との関係において論じ、カント哲学の現代的な意義や可能性を探ろうとする風潮が近年見受けられるが、小論は、そのような仕方でカントにアプローチするものではない。

確かに、カントは「動物に関する人間の義務」について語ってはいる。『道徳の形而上学』の中では、たとえば、「動物を暴力的に、そして同時に残酷に取り扱うこと」「動物を敏速に（苦痛のないように）屠殺すること」「能力を超えない範囲でのみ動物を働かせること」「単なる考察のためだけの、苦痛の多い生体実験」「年老いた馬や犬が長年奉仕してくれたことに対して感謝すること」が、「動物に関する人間の義務」との関係において語られている。こうしたカントの主張を応用倫理学的な思潮に何とか接続したくなる気持ちは分かる。しかし、カントによれば、それらは「間接的に」「動物に関する人間の義務」と言われているにすぎず、「直接的に考察するならば、あくまでも人間の自己自身に対する義務にすぎない」（VI, S.443）のである[(1)]。カントにとっては、理性を欠く存在者（vernunftlose Wesen）である（人間以外の）動物は「意のままに扱い管理できる」「物件（Sache）」（VII, S.127）であり、純粋実践理性性もしくは道徳的理性性という人格（Person）のうちにある人間性のみが、換言すれば道徳的人格性のみが尊厳（Würde）を有するのである。動物解放論あるいは動物権利論といった応用倫理学の問題領域に、カント倫理学をわざわざ持ち込み、それを部分的に利用するというアプローチの仕方は、理性中心主義というカント倫理学の限界を無視するものであるゆえ、筆者は（応用倫理学的な問題に真摯に取り組むことの重要性も、カント倫理学の限界を超えて思索することの重要性も重々承知しているが）カント研究者として、そのようなアプローチの仕方はとらない[(2)]。

カントは、カール・フォン・リンネやジョルジュ=ルイ・ルクレール・ビュフォンやG・フォルスターに代表される当時の生物学者・博物学者の諸著作を数多く読んでいたし、教授資格を得た翌年1756年の夏学期から約40年にわたって、人間・動物界・植物界・鉱物界に関する、さながら事典のような内容を含んでいる自然地理学の講義を行っていた。さらにはまた、Ｓ・Ｔ・ゼメリングから、その著書『魂の器官について（*Über das Organ der Seele*）』（公刊は1796年）について書評を求められた際に、書評を求められたのは「博物学（Naturkunde）」に関して素人ではないと評価されてのことであると、書評の冒頭にやや満足げに記載している（Vgl. XII, S.31）。こうしたことからも分かるように、筆者を含め生物学的な素養に乏しい現代のカント研究者とは違って、博物学に関するカントの博識ぶりは際立っており（もちろん、その知識は時代に制約されており、現代では陳腐に見えるものも数多く含まれているのであるが）、その博識ぶりは著作

の随所にちりばめられている。

では、そのようなカントは、そもそも動物をどのような存在としてとらえ、動物の地位をどのように考えていたのであろうか。さらには、植物をどのような存在としてとらえ、植物の地位をどのように考えていたのであろうか。また、カントの生物観にはどのような問題点があるのだろうか。小論の意図は、このことをまず明らかにしたうえで（本論文）、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルが、生物学とカントの学説との「結びつき（Anschluß）」を、いかなる点に見いだしていたのかを明確にすることである。それは、カントの学説を生物学へと「活用する（ausbeuten）」[3] ユクスキュルを通じて、カントの現代的意義を明確にすることにつながるであろう。しかし、それは、ユクスキュルの環境世界（Umwelt）論からカントを逆照射する方向にもつながるものでなければならないであろう。ユクスキュルからカントを逆照射したときに、カントの哲学はどのようなものとして立ち現われてくるのか（これについては、次回論文で考察する）。

それだけでなく、当時の学界から不当にも無視されたユクスキュルの環境世界（Umwelt）論を高く評価したM・シェーラーを介して、M・ハイデガーへとつながっていく思想史をたどるなかで、ハイデガーが1929／30年冬学期講義『形而上学の根本概念。世界－有限性 - 孤独』の中で示した、（1）岩石は無世界的（weltlos）である、（2）動物は世界窮乏的（weltarm）である、（3）人間は世界形成的（weltbildend）であるという、よく知られた三つのテーゼからカントを逆照射すると、どのようなことが語りうるのか（これについては、次々回論文で考察する）。以上が、小論の目指しているものである。

第1章　カントにおける《存在の連鎖》という問題

1．カントにおける動物の宇宙論的位置について

カントは『自然地理学講義草案（*Entwurf eines Collegi der physischen Geographie*）』（1757年）の中で、「自然地理学は、地球の自然の性質のみを考察する。地球の上にあるもの、すなわち、海、陸地、山地、河川、大気圏、人間、動物、植物、鉱物のみを考察する」（II, S.3）と述べている。また、『人間学（*Anthropologie in pragmatischer Absicht*）』の中では、「世界中の事物について、たとえば国や気候ごとに動物、植物、鉱物について長々と述べたてられた知識」は「理論的な世間知」であって、「実用的な世間知」すなわち「実用的な人間学」ではないと述べている（VII, S.120）。人間を除いた自然を動物界・植物界・鉱物界に三分するこの分類法は、カントの初期の著作から後期の著作に至るまで首尾一貫して見られるが[4]、それは、「鉱物界（Regnum Lapideum）」「植物界（Regnum Vegetabile）」「動物界（Regnum Animale）」を「自然の三界（Regna Tria Naturae）」として体系的に分類したリンネの『自然の体系（*Systema Naturae*）』（1735年）に由来するものであろう[5]。

ただし、カントはリンネに代表される「自然記述（Naturbeschreibung）」に決して満足していたわけではない。というのは、カントは『さまざまな人種について（*Von den verschiedenen Racen der Menschen*）』（1775年）の中で、（そこではリンネの名前こそ出していないが）「類似性（Ähnlichkeiten）」に従う「学校的区分（Schuleintheilung）」よりも、「産出に関する類縁性（Verwandtschaften）」に従うビュフォンの「自然的区分」（II, S.429）をいくぶん高く評価したあとで、「地球の形の変化を教え、同様にまた地球上の被造物（動物と植物）が自然的な移動によって受けてきた変化、およびこの変化に端を発する、基幹類の原型からの変種を我々に教えてくれる」「自然史（Naturgeschichte）」によって、「今は非常に冗長な、自然記述の学校体系」を、「悟性に対する自然的体系」に変える必要性について語っているからである。もっとも、そうした自然史は「我々にはまだほとんど全く欠けている」とカントは釘を刺しているのであるが（II, S.434Anm.）(6)。

さて、名目的かつ形式的な学校的分類に関する評価は別として、実際には、カントはこの三分法を首尾一貫して使用しているが、自然の三界に属する鉱物・植物・動物を、カントはどのように捉えていたのであろうか。これについては『道徳の形而上学』のある箇所が、この三分法との関係では最も参考になる。そこでは、鉱物は「単なる自然の物質」、植物は「繁殖のための組織はあるが、無感覚（empfindungslos）な自然の部分」、動物は「感覚（Empfindung）と選択意志（Willkür）とを賦与されている自然の部分」（VI, S.442）と称されている。この三分法に、人間を含む理性的存在者の三分法を加えると、宇宙におけるそれぞれの存在者の基本的位置が明らかになる。ペーリッツ編『哲学的宗教論講義（*Vorlesungen über die philosophische Religionslehre*）』の中で、カントは、人間を、「意志を欠く天使たち（willenlose Engel）」と「理性を欠く動物（die unvernünftigen Thiere）」の間に置いているが、カントは理性的存在者を、創造者としての神（=意志を有する無限的理性的存在者）・意志を欠く純粋な理性的存在者である天使・理性と意志を賦与された有限な理性的存在者である人間とに三分している（Vgl. XXVIII, 2-2, PR149）。この三分法を先の三分法に付加すると、神・天使（もしくは霊）・人間・動物・植物・鉱物という、カントにおける宇宙論的階梯が、またその中で動物が置かれている基本的位階が明確になる。

2　動物と植物との差異

カントは、『（ペーリッツ編）形而上学講義』の中で、「たしかに、鉱物界から、すでに生命の始まり（ein Anfang des Lebens）である植物界への移行（ein Übergang）が、さらには植物界から、生命のさまざまな小さな度合いがある動物界への移行が見いだされるが、最高の生命（das höchste Leben）は、人間において見いだされる自由である」（XXVIII, 2-1, PM98）と述べている。自然的素質を合目的的に展開し、自らの種を「機械論のあらゆる完全な内的完全性をもって」（VI,

S. 89Anm.）保存することを通して、自然の意図を種として満たすという仕方で、その使命を達成するという点では、植物は動物と何ら異ならない。同じ生物（lebende Wesen）である。それにもかかわらず、カントにとって、植物が「生命の始まり」でしかないのは、なぜなのであろうか。このことを明らかにするために、カントが動物と植物との差異をどのように捉えていたのかを見てみよう。

それには、動物と植物との上述の区分が、先ずは参考になるであろう。そこでは、植物が「無感覚な（empfindungslos）」存在者であるのに対して、動物は「感覚（Empfindung）と選択意志（Willkür）とを賦与された」存在者であるとされていた。この区分における動物と植物との決定的な差異は、感覚の有無にある。ところで、感覚とは、『純粋理性批判』によれば、「対象の、表象能力に対する作用の結果（die Wirkung eines Gegenstandes auf die Vorstellungsfähigkeit）」（A19f.=B34）である。この定義に従うかぎり、植物を無感覚な存在者であると規定することは、植物を、受容性の能力である感性と表象能力とが欠如した存在者であると規定することと同義である。このことは、さらに次のことを意味する。「表象に従って活動することがない被造物は、快・不快の能力をもたない」（XXVIII, 2-1, PM170）と言われていることから明らかなように、カントは、動物には快・不快の能力があるが、植物には快・不快の能力が欠如していると考えているのである。植物と動物とは以上の点で決定的に異なるとカントは考えているのであるが、このことは些事として看過すべきではない。というのは、植物に感覚があるかどうかという問題は、その淵源を古代ギリシャにまで遡ることができるのであるが、カントは、植物を無感覚な存在者であると捉える点において、西洋哲学史のある伝統的な枠組みを（そのままの形ではないが）受け入れていることが明確になるからである。

カントは『自然地理学』の中で、「感覚のある植物（empfindliche Pflanze [Planta sensitiva]）」（IX, S.364）に言及しているが、これを解明の糸口にしてみよう。カントは具体的な植物名を挙げていないが、葉に刺激が与えられると身振り劇（μῖμος）のように葉を閉じる運動をするオジギソウ（学名Mimosa pudica）に代表される植物のことを、カントが念頭に置いていることは文面から明らかである。あのC・R・ダーウィンも、後に、『植物の運動力（*The power of movement in plants*）』（1880年）の第6章で、オジギソウなどの「就眠運動もしくは昼夜運動（sleep or nyctitropic movements）」について論じているが、現在、側小葉を旋回運動させるマイハギ（学名Codariocalyx motorius）や食虫植物のハエジゴク（学名Dionaea muscipula）や学名に「感覚のある（sensitivus）」という語が見られるオサバフウロ（学名Biophytum sensitivum）など、非常に多くの種類の〈動く植物〉が知られており、その運動の植物生理学的研究などが進んでいる。こうした〈感覚のある動く植物〉に対する関心そのものは、古代ギリシャの時代からあったようである。しかし、「感覚のある植物は、触れられると、あたかも感覚を有するかのように、小枝や葉を枝垂れさせる」（IX, S.364）という接続法第二式を用いた表現からも明らかなように、カントは、「感覚のある植物」と一般に称されている植物に、感覚があるとは決して認めていな

いのである。古代ギリシャに遡ってみると、プラトンは『ティマイオス』の中で、植物の魂は「思惑にも推理にも理性にも、いっこうに与るところがなく、ただ快苦の感覚と欲望だけに与っている」（『ティマイオス』77b）とティマイオスに語らせている。この箇所から判断すると、プラトンは、植物が快苦の感覚と欲望をもつと考えていた可能性がある。これに対して、物体の形相（εἶδος）を質料（ὕλη）抜きで受容する能力を感覚（αἴσθησις）だと考えるアリストテレスは、植物には、そのような感覚器官も感覚能力もないのだから、植物には感覚がないと結論づけている（『デ・アニマ』424a17, a32）。先に引用した「対象の、表象能力に対する作用の結果」（傍点筆者付加）というカントの感覚（Empfindung）の定義は、実は、アリストテレスの感覚（αἴσθησις）の定義の延長線上に位置しているのであり、カントはアリストテレスの伝統を引き継いで植物を無感覚な存在者と捉えているのである。

ところで、カントは、動物と植物との差異は感覚の有無にあるとだけ考えていたのではなく、恣意的運動の有無も同時に考えていたと思われる。『（ペーリッツ編）形而上学講義』の中では、何か別の物に動かされて動くのではなく「恣意的に自分で運動する（sich willkührlich von selbst bewegen）」（XXVIII, 2-1, PM216）かどうかが、生命なき（leblos）物質と動物との差異であると言われており、そこでは、動物は、自ら恣意的な運動をする存在者であると捉えられている。また、『視霊者の夢』においては、「植物には、恣意的運動の器官、およびそれとともに生命の外的徴表（die äußerliche Merkmale des Lebens）が欠如することが許される」（II, S.330f.）と述べられている。これらの箇所から判断すると、カントは、生命の外的徴表である恣意的な運動およびこの運動を生じさせる器官の有無もまた、動物と植物との差異であると考えていたと推測できる。だが、ここで言われている運動とは、そもそもどのような種類の運動のことなのであろうか。運動という概念がそもそも多義的であるだけに、意味を明確にして混同を避けるためには、生命の外的徴表とされる恣意的な運動が、〈動く植物〉の運動といかなる意味において異なるのかを明らかにしておく必要がある。

この問題に関しても、先に感覚の有無の問題の箇所で述べたことと同様のことが言える。アリストテレスは、感覚を有することが動物の第一義的な特徴であるとしたうえで、さらに、植物の特徴である「栄養、減衰、成長という意味での運動」とは異なる、恣意的な「場所的な移動および静止」（『デ・アニマ』413a20）という意味での運動を、動物のもう一つの特徴としている。カントが動物の恣意的な運動について語る場合、それは、アリストテレスのいう「場所的な移動および静止」という意味においてである。〈動く植物〉は、場所的な移動の欠如という意味では、動かないのである。アリストテレスは、動物を、「場所的な移動および静止」をする動物と、イソギンチャクやカイメンなどの「生涯にわたって静止し不動のままである」（432b19, Vgl.413b1）動物とに二分しているが、これに対してカントは、「ポリプ（Polypen）やその他の植虫類（Zoophyten）と植物との近い類縁性」（II, S.331）について語ってはいるが、残念なことに、カントにはアリストテレスのような明確な区分が見あたらない。そのために、カントが、（ア

リストテレスと同様に)感覚の有無が動物と植物との唯一決定的な差異であると考えていたのか、それとも（リンネと同様に、あるいはリンネに由来する通俗的な考えと同様に）感覚の有無と恣意的な運動の有無とが等価的に、動物と植物との決定的な差異であると考えていたのかは、必ずしも明確ではない。

いずれにしても、カントは大枠では、生命（ζωή）を、（1）「栄養、減衰、成長という意味での運動」を行う植物、（2）「栄養、減衰、成長という意味での運動」に加えて、感覚を有し「場所的な移動および静止」をする動物、（3）「栄養、減衰、成長という意味での運動」に加えて、感覚を有し「場所的な移動および静止」をするだけでなく、さらに「思考」する人間に区分する、アリストテレスの『デ・アニマ』および、前二者と鉱物界とを「自然の三界」とするリンネの伝統の中で思考しているのである[7]。

3　移行について

ところで、カントがアリストテレスの分類法の枠組みの中にいることは、以下のような問題を引き継いでしまっていることを意味する。すでに引用した箇所であるが、カントは『(ペーリッツ編）形而上学講義』の中で、「鉱物界から、すでに生命の始まりである植物界への移行（ein Übergang）が、さらには植物界から、生命のさまざまな小さな度合いがある動物界への移行が見いだされる」と述べていた。鉱物界から植物界への、また植物界から動物界への移行（ein Übergang）というこの問題は、アリストテレスに由来するものである。自然の「連続性（συνέχεια）」を主張するアリストテレスは、『動物誌』および『動物部分論』において、無生物から植物への、また植物から動物への「移行（μετάβασις）」について以下のように述べている。「自然は無生物から動物に至るまで少しずつ移りゆく」（『動物誌』588b4-23）、「自然は、無生物から、生物ではあるが動物ではないものを経て、動物に至るまで、連続的に移りゆく」（『動物部分論』681a10-21）、と。アリストテレスの「移行」の解釈は、研究者によって意見が分かれているようであるが、カントがここで主張している、鉱物界から植物界への、また植物界から動物界への「移行」が含意する自然の連続性は、どのように解釈すればよいのであろうか。カントは『純粋理性批判』の中で、「世界に間隙なく、飛躍なく、偶然なく、運命なし（*in mundo non datur hiatus, non datur saltus, non datur casus, non datur fatum*）」（A229=B282）と述べている。この四つの命題が意味しているのは、現象の系列における悟性綜合の無際限な連続性という意味での世界（自然）の連続性であるが、「移行」が含意する自然の連続性は、それとは全く異なるものである。「生命の始まり」とか、「生命のさまざまな小さな度合い」とかといった表現が暗示しているように、「移行」という語に含意されている自然の連続性は、実は、生命という観点からの連続性なのである。では、「移行」という語に含意されているこの自然の連続性には、どのような問題が潜んでいるのであろうか。

アリストテレスは、動物を有血動物と無血動物に二分したうえで、有血動物を人類・胎生四足類・卵生四足類・鳥類・魚類に、無血動物を軟体類・軟殻類・有節類・穀皮類に細分化している。移行が語られている上記の箇所では、穀皮類の中でも植物とほとんど異ならないホヤやカイメンといった植物的動物が、植物と動物との連続性を示す典型例として挙げられている。「移行」を、植物から、殻皮類の中の最下位に位置する植物的動物を経て、より上位のものへの歴史的な連続性の意味に解すれば、それは進化の問題となるが、アリストテレスの時代には進化論的発想はない。それゆえ、アリストテレスは、「移行」という言葉によって、生物種の下位に位置するものと上位に位置するものの間に連続的に見られる生態学的・生理学的類縁性を示そうとしているのだと解すべきなのであろう。ただし、アリストテレスは同時に、個体の自然的発生（αὐτόματως γίγνεσθαι）という意味での、無生物から生物への移行をも主張している（『動物発生論』1巻1章715b3などを参照）。アリストテレスは、無生物と植物と動物と人間とを質的に区別しながらも、すなわち、それらの間に質的な非連続性を認めながらも、同時に、それらの間に発生論的な連続性をも認めているのである。白鳥の首フラスコ実験によって自然発生説を否定し、論文『自然発生説の検討』（1861年）を著したルイ・パスツールや、『種の起源』（1859年）において自然淘汰を主張し、『人間の由来』（1871年）において動物と人間との連続性を主張するダーウィンの自然科学的な問題の淵源は、実は、非連続性と連続性をめぐるアリストテレスの問題にまで遡るのである。

こうした問題をカントもまた引き継いでいるのであるが、アリストテレスの動物の区分と比較すると、『自然地理学』に示されているカントの動物および植物の区分は、分類好きのカントにしては雑然としたものである。以下に示す、『自然地理学』第二部「陸地が含むものの特殊な考察」の、人間から植物界に至るまでの章立てを見れば分かるように、区分と言えるのかどうかも怪しい代物である。というのも、首尾一貫した区分の原理がなく、特に後半は、人間にとって有益であるものや有害であるものといった観点から動物種や植物種が雑学的に列挙されている感があることは否めないからである。

第一篇　人間について

第二篇　動物界

　　第一章　蹄を有するもの

　　単蹄動物・偶蹄動物・三蹄動物・四蹄動物・五蹄動物

　　第二章　有趾動物

　　一趾動物・二趾動物・三趾動物・四趾動物・五趾動物

　　第三章　鰭を有する動物

　　カワウソ類・ビーバー類・奇形の足を有する海の動物

　　第四章　卵生四足動物

第五章　第一節　海棲動物
　　第二節　甲殻動物
第六章　若干の注目すべき昆虫
　　益虫・害虫
第七章　その他の匍匐動物
第八章　鳥界
第三篇　植物界
Ⅰ　注目すべき樹木について
Ⅱ　その他の栽培植物や草木について
Ⅲ　その他の注目すべき植物

ここに見られる動物の分類が誰の分類法に依拠しているのかは筆者には不明である。リンネの『自然の体系』（初版、1735年）は、動物を四足綱（QUADRUPEDIA）〔1758年の第10版では哺乳綱（MAMMALIA）〕・鳥綱（AVES）・両生綱（AMPHIBIA）・魚綱（PISCES）・昆虫綱（INSECTA）・蠕虫綱（VERMES）に分類するものであるから、リンネ由来のものでないことは確かだが、一応区分の原理らしきものはある。これに対して、植物に関するカントの章立ては、「綱、目、属および種により体系的に配置された自然の三界（REGNA TRIA NATURAE SYSTEMATICE PROPOSITA PER CLASSES, ORDINES, GENERA, & SPECIES）」（『自然の体系』の副題）というリンネの分類体系化を批判するビュフォンの、「人間との関係……（中略）……の濃いものから薄いものへ」と進む人間中心主義的な記述方法に近い[(8)]。カントは、『自然地理学の講義草案』（1757年）において、自然地理学は「海、陸地、山地、河川、大気圏、人間、動物、植物、鉱物のみを考察する」が、それは「完全さと哲学的厳密さ」をもって考察するのではなく、「一旅行者の知的好奇心」（II, S.3）をもって考察するのだと述べている。そして、その直後に、「すべての源泉から汲みとり、すべての宝庫を探り、ヴァレニウス、ビュフォン、およびルロフの著作が自然地理学の一般的基礎として含むもの以外にも、老練の旅行者の手になる特別の国々の最も基本的な記述、一般的全旅行誌やゲッティンゲンの新旅行記集、ハンブルク誌およびライプチヒ誌、パリおよびストックホルムの学士院記事、その他を渉猟し、この目的にかなうものすべてから選出して体系をこしらえた」（II, S.4）と述べている。カントの区分が厳密でないのは、カントが構想する自然地理学の学問性格と、知的好奇心を満たすための素材の多様さにその理由が求められるであろう。

カントがここで提示している、植物界に関する区分とは言い難いような区分をもとに、さらにまた動物界に関する区分をもとに、カントがどのような「移行」を考えていたかを推測することは不可能である。というのは、『自然地理学』における動物界および植物界の区分は、杜撰であるというだけでなく、ビュフォンの「自然的区分」をリンネの「学校的区分」よりも高く評価し

た際に示されていた、「産出に関する類縁性（Verwandtschaften）」とは全く無関係に区分がなされているからである。それゆえ、動物界および植物界に関するこの区分そのものは、「移行」の問題とは無関係であると言わざるをえない。この区分が「移行」の問題の解明に役に立たないのだとすると、「移行」についてどのように考えたらよいのであろうか。

先にも引用したが、カントは「ポリプ（Polypen）やその他の植虫類（Zoophyten）と植物との近い類縁性」について語っていた。このような主張から判断すると、カントもまたアリストテレスと同様に、生物種の下位に位置するものと上位に位置するものの間に連続的に見られる生態学的・生理学的類縁性を、「移行」という語で表現しようとしているのだと考えることができる。生命をもたない鉱物界から生命の始まりであるとされる植物界への「移行」という問題は、それを発生論的に解すれば自然発生説の主張につながるのであるが、その問題は別として、生物界における「移行」という問題には、生物種の下位に位置するものと上位に位置するものの間に連続的に見られる生態学的・生理学的類縁性の問題が含まれていると考えられるが、果たしてそれだけなのであろうか。

カントは、『視霊者の夢』の中で、「自然のどの項にまで生命が拡がっているのか、またいかなる度合いが、完全な無生命に最初に接する生命の度合い（Grad des Lebens）であるのかは、おそらくいつになっても確実には決定されえないであろう」（II, S.330）と述べている。ここで述べられているのは、生命の度合いという観点からすると、生命の度合いの高い生物から完全な無生命に隣接する生物に至るまで、「測り知れぬ、しかし未知のひと続きの段階（eine unermeßliche, aber unbekannte Stufenfolge）」（II, S.330）が成立していること、そして、生命の度合いという観点からの生物の区分は無際限に継続することである。「移行」という語には、生態学的・生理学的類縁性のみならず、このような生命の度合いという観点からの連続性も同時に含意されていると考えることができるのではないだろうか。

ところで、カントにおいて「移行」という語は、このような生態学的・生理学的類縁性と生命の度合いの連続性とを含意しているのであるが、「移行」という語には、発生や進化といった意味合いは含まれていないのであろうか。カントは、『自然地理学』の第3章「植物界」の末尾に付した「補遺」の中で、A・キルヒァーの「植物の反復発生の物語（die Fabel von der Palingenesie der Pflanzen）」（IX, S.365）にわざわざ言及している。それは、アンモニウム塩などの「塩の凝結と結晶」や、「樹状沈殿銀（Arbor Dianae）」が植物の発育を思い浮かばせることに由来するのであるが（金属樹生成の化学実験は、現在でも高等学校の授業などで取り上げられることがある）、カントは、このような物珍しい化学実験に基づく植物の反復発生の考えを「物語（das Gedicht）」であるとして否定している。エルンスト・ヘッケルの反復説が登場するのは19世紀の後半になってからであるので、ここで言われている「植物の反復発生」の考えが、誰の考えであり、どのようなものなのであるのかは浅学の筆者には不明である。ただ、文脈から判断するかぎり、カントは少なくともここでは、ヘッケル風の表現を使用することが許されるならば、

金属樹の場合のように無生物と植物との間に形態的な類似性が観察されることがあるとしても、植物の個体発生（発生過程）を「系統発生の短縮された、しかも急速な反復」[9]と捉えることに異議を唱えているのであろう。

実際、カントは『判断力批判』のある脚注の中で、有機的存在者が「天然の無機的物質の機構（Mechanik）」によって産出されるとする「偶然発生説（generatio aequivoca）」――アリストテレスに由来する自然発生説――を「不合理」なものとして斥けるだけでなく、この偶然発生説は、同時に、「ある種の水棲動物が次第に湖沼動物に発達し（sich ausbilden）、この湖沼動物から何代かの産出を経て陸棲動物に発達する」という「言葉の最も一般的な意味における単一発生説（generatio univoca）」（V, S.419Anm.）でもあるが、自然に関する我々の経験的知識は「異種的発生（generatio heteronyma）」（V, S.420Anm.）の実例を一つも提示していないという理由で、これもまた斥けているのである。

この脚注が「自然目的としての物の説明において、メカニズムの原理が目的論的原理に必然的に従属することについて」と題された章の中にあることは、注意しておくべきであろう。『視霊者の夢』の中で言われている「生命の度合い」という観点からの連続性は、後に『判断力批判』において、「合目的性の比較的低い形式の被造物」から、地衣類・蘚苔・ポリプを経て、「目的の原理を最も顕著に実証していると思われる人間」への「段階的近接」という目的論的な連続性として、捉え直されることになるからである[10]。『判断力批判』に見られるような目的論的自然観は、『視霊者の夢』の中にはまだ見られないのであるが、『視霊者の夢』の中で言われている「生命の度合い」という観点からの連続性とは、どのようなことを意味しているのであろうか。

4　生命の始まりと生命の度合い

カントは、『（ペーリッツ編）形而上学講義』の別の個所で、「生命とは自己活動性の内的原理である。この内的原理に従って行動する生物は、表象に従って行動しなければならない」（XXVIII, 2-1, PM169、傍点筆者付加）と述べている。さらに別の個所では、「動物は生命のある物質である。というのは、生命とは、内的原理に基づいて選択意志（Willkühr）に従って自己自身を規定する能力だからである」（XXVIII, 2-1, PM217、傍点筆者付加）と述べている。後者の主張は、自己活動性を、場所的な移動と静止という恣意的空間運動という意味での活動性のみならず、選択意志の自己規定の活動性として捉えている点で、極めて重要である。というのは、純粋実践理性（それは純粋意志〔der reine Wille〕にほかならない）の自己規定の活動性である自律としての自由は、この選択意志の自己規定の活動性の延長線上にある自己活動性であり、そこにこそ「最高の生命」（XXVIII, 2-1, PM, 98）を見いだすことができるのだとする、カントの理性中心主義的な基本的構えが見えてくるからである。

ところで、植物が生命をもつものであるかぎり、植物にも自己活動性の内的原理が存在してい

るのでなければならないのであるが、カントは植物の自己活動性をどこに見いだしていたのであろうか。カントは『視霊者の夢』の中で、栄養の器官を外部にもつ植物について、植物は「すでに十分に外力によって扶養されており、たとえそれが内的生命の原理を生長（Vegetation）の中に含んでいるとしても、外的意志的活動のための有機的組織を少しも必要としない」（II, S.331）と述べている。このことから明らかなように、カントは、生長（Vegetation）を植物の自己活動性であると捉えているのである。わずかに生長のうちにしか自己活動性が認められず、感性および表象能力も快・不快の能力も欠如しているために、「生命の外的な徴表」（II, S.331）である恣意的な空間運動という意味での自己活動性も、選択意志の自己規定の活動性も欠如した植物は、生命なき物質である鉱物とは異なり生命を有しているとしても、生命の最高形態を純粋実践理性の自己規定の活動である自律としての自由に見いだすカントにとっては、やはり「生命の始まり」でしかなかったのであろう。

カントは、『形而上学講義』の中では、生命（Leben）を「動物的生命」「人間的生命」「精神的生命」（XXVIII, 2-1, PM170）に三分するのみで、植物的生命については一言も語っていない。しかし、カントは『視霊者の夢』の中で、「古代の人々は三種類の生命、すなわち、植物的生命、動物的生命、理性的生命を想定できると信じていた」（II, S.331）と語っているのだから、植物的生命（das pflanzenartige Leben）という概念を当然知っていたはずである。これらを合わせて考えれば、以下のように言うことができるであろう。すでに述べたようにカントは、神・天使（もしくは霊）・人間・動物・植物・鉱物という宇宙論的階梯について語っていたが、その階梯とは、精神的生命・人間的生命・動物的生命・植物的生命・生命なきものという、自己活動性の原理である生命という観点からの《存在の連鎖》のことである、と[(11)]。

だが、「測り知れぬ、しかし未知のひと続きの段階」と言うほどの連続性もしくは連鎖があると、カントは本当に考えていたのであろうか。この問題は《充満の原理》の問題でもあるのだが、この問題を考える手がかりとして、まずは動物界における連鎖的階梯の問題を取り上げてみよう。

5　動物観と連鎖の問題

カントが採用している、生物を植物界と動物界とに分けるリンネ由来の二界説は、現代においても、非学問的なレベルでは一般に通用しているものである。その意味では常識的なものである。二界説は、R・H・ホイタッカーの五界説どころか八界説まで登場している現代においては、もはや分類学的には支持されないであろうが、カントの時代においては極めて常識的なものであったはずである。というのは、二界説では分類困難な菌類や単細胞生物などに関する知見が集積されたために二界説が根幹から揺るがされ、界の再編が始まるのは、19世紀末に三界説を提唱したE・ヘッケルからだからである。このような時代的な制約が存在することを踏まえたうえで、カントが、動物をどのような存在者として捉えていたかを、上述したことから再度まとめてみよう。

カントによれば、動物とは、（1）理性を欠いてはいるが、感性と表象能力を有する存在者である。このことは、まず、動物が感覚や快・不快の能力を有する存在者であることを同時に意味する。しかし、それだけでなく、「満足もしくは不満足に従って行為する能力は、実践的・活動的欲求能力である」(XXVIII, 2-1, PM180)と言われていることからも明らかなように、動物が快・不快の能力を有する存在者であることは、（2）動物が欲求能力（Begehrungsvermögen）および選択意志（Willkür）を有する存在者であることを意味している。このことは、『判断力批判』において「動物もまた表象に従って行為する（動物は、デカルトが主張しているような機械ではない）」（V, 464Anm.）と明言されていることや、『形而上学講義』において「動物は単なる機械や物質ではなくて、魂（Seele）をもっている」（XXVIII, 2-1, PM216）と言われていることからも明らかなように、カントが動物機械論の立場には立っていないことを意味している。だが、動物が有する表象能力および欲求能力とは、カントにとって、どのような性質のものであったのだろうか。

（1）動物の欲求能力

カントは『純粋理性批判』において、「選択意志は、（感性の動因によって）受動的（パトローギッシュ）に触発されるかぎり、感性的である。選択意志は、それが受動的（パトローギッシュ）に強制されうる場合には、動物的（動物的決定〔arbitrium brutum〕）である」（A534=B562）と述べている。動物の選択意志は、人間のそれとは質的に異なり、「不可避な力（vis neccessitans）」（XXVIII, 2-1, PM180）をもつ「傾向性（感性的衝動、刺激〔stimulus〕）によって」（VI, S.213）必然的に規定される感覚的動物的決定〔arbitrium sensitivum brutum〕であるという主張は、随所に見られる（Vgl.A802=B830、VI, S.213、XXVIII, 2-1, PM182usw.）。ところで、動物の選択意志は刺激によって必然的に規定されるという主張は、先に引用した「動物は生命のある物質である。というのは、生命とは、内的原理に基づいて選択意志（Willkühr）に従って自己自身を規定する能力だからである」（傍点筆者付加）という主張と、どのような仕方で整合しうるのであろうか。

カントは『形而上学講義』の中で、「動物的生命は、いかなる自発性（Spontaneität）ももっていない」（XXVIII, 2-1, PM173）と述べている。また別の箇所では、「動物は外官のあらゆる表象をもっているであろうが、内官に、自己の意識に、端的に言えば自我の概念に基づくような表象だけは欠いているであろう」（XXVIII, 2-1, PM218）とも述べている。要するに、自己意識および「表象の同一性」（XXVIII, 2-1, PM219）を欠き、理性を欠く動物の決定は、「感性的であれ知性的であれ自由である」「人間的決定（arbitrium humanum）」（XXVIII, 2-1, PM183）とは質的に異なり、外官のもたらす感性的表象を「理性の類比物（analogon rationis）」（XXVIII, 2-1, PM219）である本能（Instinkt）が必然的に結合しているにすぎないと、カントは考えているのである。動物は、生命を有するものであるかぎり「内的原理に基づいて選択意志に従って自己自身を規定」していると言うことができるかもしれないが、その自己規定は、奇妙な表現になるが、自発性なき自己規定でしかないのである。つまり、動物の自己活動性は、本能に厳格に基づいて

いる自発性なき自己活動だというのである。

ところで、本能という概念を持ち出すのは、機械仕掛けの神（deus ex machina）を持ち出すのに等しいと言わざるをえないが、動物界における「測り知れぬ、しかし未知のひと続きの段階」の根拠を、本能に求めるのは無理があるように思われる。というのは、動物の本能にはさまざまな度合いがあり、その本能の度合いの違いが、動物界における連鎖的階梯の根拠だと主張するのは、機械仕掛けの神を二重に登場させることになりかねないからである。では、動物界における連鎖的階梯の根拠は、どこに見いだすことが可能なのであろうか。

（２）動物の表象能力

カントは『三段論法の四つの格』の中で、論理的区別と自然的区別について、「論理的に区別するとは、事物ＡがＢでないことを認識することであり、それは常に否定判断である。自然的に区別する（physisch unterscheiden）とは、異なった表象によって異なった行動へと駆り立てらえることである」（II, S.60）と述べている。そこでは事例として、犬が、あぶり肉とパンとを自然的に区別しており、あぶり肉が引き起こす感覚はパンが引き起こす感覚とは異なった欲求を引き起こすことが挙げられている。動物は、動物的感性および表象能力によって事物を自然的に区別しており、その欲求能力は表象能力に与えられる刺激によって本能的・必然的に規定されるというのである。動物の欲求能力は、その感性に与えられる刺激によって本能的・必然的に規定されるとされている以上、動物界における連鎖的階梯の根拠は、動物の、この自然的に区別する能力の多様性および差異性に求めるしかないのではないだろうか。

ただし、ここで問題となっている動物の表象については少し補足が必要であろう。カントは『人間学』の中で、ある表象を抱いていることを直接には意識していなくても、間接的に意識することは可能であると述べ、そのような表象を「明晰な（klar）表象」から区別して「あいまいな表象（dunkele Vorstellungen）」と名づけているが、この曖昧な表象の領域は、人間だけでなく「動物においてもまた」、明晰な表象の領域よりもはるかに広大であると述べている（Vgl. VII, S.135）。動物が、その動物的感性および表象能力によって事物を――たとえばあぶり肉とパンとを――自然的に区別しているという場合、そこで問題となっている表象は、少なくとも明晰な表象であろう。ただ、意識との結びつきに関しては問題が残っている。動物が有するこの明晰な表象は、人間の場合のように自己意識に基づくものでは決してありえないが、間接的に意識可能なあいまいな表象が動物にも存在するとされている以上、意識された表象であると解することもできる。だが、『形而上学講義』では、（感覚能力、想像力など）動物の感性は「意識と結びついていない」（II, S.221）とも言われており、ここで問題となっている明晰な表象と（自己意識ではなく）意識との結びつきについては、カントは首尾一貫していない。そのため、明確な結論を導き出すことは困難である。というのは、あぶり肉とパンとを自然的に区別する犬に関してであれば、その感性は意識と結びついているとカントが考えていたと想像することは可能であるかもしれないが、アントニ・ファン・レーウェンフックによって17世紀に発見されたゾウリムシのような繊毛虫類

――カントはゾウリムシのことを知ってる――の感性が意識と結びついているとカントが考えていたと想像することは、少々難しいように思えるからである。

動物の表象能力については、さらにもう一点補足が必要であろう。『形而上学講義』の中で、カントは「動物の感性は、我々人間の感性よりもはるかに優れている」（XXVIII, 2-1, PM220）と述べているが、これを、どのように解釈することが可能かについて補足しておく必要があろう。この一文は、「我々は、悟性や理性によってでなければ成り立たないような行為が動物によってなされるのを見る。だから、我々の感性は動物の感性と同様な事情にあるが、動物の感性は、我々人間の感性よりもはるかに優れているのである。しかし、我々はこの欠損を、われわれ自身の意識およびその結果である悟性によって補ってきたのである。」という文章中にあり、カントの主張の重点は、人間は、動物と比較して感性が劣っているとしても、悟性および理性によって補足しているのだという点にある。このことから考えると、必ずしも、すべての動物の感性が人間の感性よりも優れていると主張しようとしているわけではなさそうである。実際、犬の嗅覚は、臭気の種類にもよるが人間の2000倍から１億倍を感知すると言われているが、視覚や味覚については人間よりも劣っていると言われている。先の一文は、動物の感性は我々人間の感性よりもはるかに優れている場合がある、といった程度の意味に解するのが無難であろう。

たしかに、カントは、動物界における連鎖的階梯について明確なことを述べているわけではないが、あえてその根拠を求めるとすれば、この階梯が自己活動性の原理である生命という観点からの《存在の連鎖》である以上、動物の自然的に区別する能力の多様性および差異性に求めるよりほかないであろう。すなわち、大型類人猿の感性から、たとえば、ユクスキュルがその著書の冒頭で例として挙げている酪酸の化学刺激・温度刺激・機械的触覚刺激のみを受容するマダニの感性のようなものに至るまでの、感性の差異に基づく連鎖を考えるよりほかないであろう。

6　植物界における《存在の連鎖》

生命という観点からの動物界における《存在の連鎖》については、以上のように考えることができるのであるが、カントの、生命という観点からの《存在の連鎖》の主張には難点もある。というのは、植物界における《存在の連鎖》をカントがどのように考えていたのかが、全く分からないからである。

上述したように、カントは、植物を生長（Vegetation）のうちにしか自己活動性が認められない生物として捉えていた。しかし、植物の生長に関する連鎖的階梯について、カントは何も語っていないのである。カントが、リンネのように生殖器官に注目して植物界を分類し、生長とともに生殖活動を植物の自己活動性だと捉えていたのであれば、生殖活動の多様性および差異性を植物界における《存在の連鎖》の根拠にすることもできたかもしれないが、すでに述べたように、カントの『自然地理学』における植物界に関する記述は、ビュフォンの人間中心主義的な記述方

法に近いものであり、そこから生長の多様性や差異性を読み取ることは不可能である。カントは、植物を「生命の始まり」と記述するのみで、生命という観点からの植物界における《存在の連鎖》については、残念なことに、何も語っていないのである。

７　人間界においても《存在の連鎖》は考えられるのか

では、人間界についてはどうであろうか。人間界においても《存在の連鎖》は考えらえるのであろうか。いわゆる三批判書は、『純粋理性批判』の第一版の序文に記されているように、人間の「理性能力一般の批判」（A XII、傍点筆者付加）を目指すものであり、理性批判において哲学的反省の対象となっているのは、多様性や差異性が捨象された人間感性一般・人間悟性一般・（狭義の）人間理性一般である。それゆえ、生命という観点からの人間界における《存在の連鎖》の問題は、三批判書の中には決して登場することはありえない。

では、『さまざまな人種について』（1775年）、『人種の概念の規定』（1785年）、『哲学における目的論的原理の使用』（1788年）といった、人種に関する諸著作の中に、この問題を解明する糸口は存在するのであろうか。カントは、白色人・黄色インド人・ニグロ・銅赤色アメリカ原住民という皮膚の色に関する人間の四つの種族（Klasse）は、「唯一の第一の基幹（Stamm）の萌芽」の中に必然的に含まれていた種族的差異性への素質（Anlage）によって、この唯一の基幹から派生したと考えている（Vgl. VIII, S.98）。そして、この「基幹の統一性（die Einheit des Stammes）」のゆえに、これら四つの種族は「種（Art）」ではなく「人種（Race）」と称されるべきであり、「人間の異なる種などといったものは全く存在しない」（Vgl. VIII, S.99f.）とカントは明言している。種族的差異はあるにしても、すべての人間は類としては同一であり、この種族的差異に、生命という観点からの《存在の連鎖》の問題を見いだすことは困難である。

では、人間界においては《存在の連鎖》の問題は考えられないのであろうか。ここで問題となっている《存在の連鎖》が、自己活動性の原理である生命という観点からの《存在の連鎖》である点に、この問題を解く鍵があるように思う。すでに述べたように、カントは、純粋実践理性の自己規定の活動性である自律としての自由に「最高の生命」を見いだしていた。多様性や差異性を捨象し、人間理性一般を反省の対象とする三批判書には登場すべくもないが、『脳の病気に関する試論』（1764年）や『実用的見地における人間学』（1798年）では、理性能力を賦与されていながらも「障害［欠陥］（Gebrechen）」（VII, S.202）のために自らの理性能力を行使しえない他律的な存在者である、狂人もしくは精神異常者について論考がなされている。それらの著作における《狂気》の区分は、細かい点では異同も多いが、カントは首尾一貫して、感官表象・構想力・判断力・理性といった認識諸能力との関係において《狂気》を分類しようとしている[(12)]。カントの立場からすれば、「精神が乱された者（der Gestörte）」には、それが理性能力を行使しえない他律的な存在者であるかぎり「最高の生命」は決して認められないであろう。狂人もしくは精

神異常者には、場合によっては限りなく動物に近い生命しか認められないであろう。もし認識諸能力の「障害［欠陥］」の種類や程度に応じて、広義の理性の自己活動性に差異が認められるのだとすれば、人間界においても生命という観点からの《存在の連鎖》を認めることができるのかもしれない。

8　まとめ

カントの叙述からは、「測り知れぬ、しかし未知のひと続きの段階」と言うほどの連鎖的階梯を植物界に見いだすことは困難である。また、天使（霊）界についても、カントが天使の位階のようなものを考えていたかどうかは不明である。しかし、大枠では、神・天使（もしくは霊）・人間・動物・植物・鉱物という宇宙論的階梯を、自己活動性の原理である生命という観点から、精神的生命・人間的生命・動物的生命・植物的生命・生命なきものという連鎖的階梯と捉え、それを、現象の系列における悟性綜合の無際限な連続性という意味での《自然の連鎖》――《存在の連鎖》――とは異なった意味において、生命という観点からの《存在の連鎖》であると考えていたと言うことはできるであろう[13]。（未完）

注

（1）カントからの引用は、アカデミー版カント全集による。慣例に従い、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で表記し、文中に記載した。ただし、『純粋理性批判』に関しては、これまた慣例に従い、第1版をA、第2版をBとしてページ数をアラビア数字で表記した。
なお、『道徳の形而上学』の遺稿には同様のことが書かれているが、そこでは「動物および植物に対する間接的義務」（傍点は筆者付加）という表現が用いられていることは注目に値する。XXiii, S.403.

（2）そのようなアプローチの仕方に対する筆者の批判に関しては、拙論「カントの賞味期限と倫理学の行方」（『ディルタイ研究』第17号、日本ディルタイ協会発行、2006年11月、89～99頁）を参照されたい。

（3）Jakob von Uexküll und Georg Kriszat, *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*, 1956 [1934], Rowohlt Taschenbuch Verlag, S.30.（ユクスキュル／クリサート著『生物から見た世界』〔日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫、2005年〕24頁）

（4）この三分法は、上記のほか、『純粋理性批判』A667=B695、『道徳の形而上学』VI, S.442、ペーリッツ編『形而上学講義』XXVIII, 2-1, PM98、にも見られる。

（5）自然的分類法を提唱したビュフォンの『一般と個別の博物誌（*Histoire naturelle, generale et particuliere*）』には（少なくともビュフォン生前の初版本には）、この三分法はない。なお、リンネの『自然の体系』およびビュフォンの『一般と個別の博物誌』については、いずれも初版そのものではないが、電子画像化されたテキストを「京都大学所蔵資料で見る博物学の時代」（http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b01/index.html）において、見ることができる。

（6）『人種の概念の規定』（1785年）の中では、自然記述は「名目的類（Nominalgattung）」で満足するが、自然史は「実在的類（Realgattung）」を見いだすものであると、同様のことが語られている。同様の考えは、『哲学における目的論的原理の使用について（*Über den Gebrauch teleologischer Principien in der Philosophie*）』（1788年）にも見られる（Vgl.VIII, S.161）。相当早い時期から見られるカントの自然史に関する構想は、1790年の『判断力批判』における目的論的自然観において一応結実するが、このことに関するカントの内面的思想的発展史については、別の機会に論じたい。

（７）カントは『視霊者の夢』の中で、ライデン大学の医学・植物学・化学の教授であったヘルマン・ブールハーフェ（Hermann Boerhaave）の著作『化学要綱（*Elementa chemiae*）』（1732 年）の、「動物はその根を胃の中に（内部に）持っている植物である」という一文を引用している（II, S.330）。この一節は、アリストテレスの『老若について、生死について、息について』の中の、食べ物を取り込む口が下部の根にあるのだから「植物は逆立ちした動物である」という一文を翻案した表現であろう。当時の自然科学の諸著作を通して、間接的に、カントはアリストテレスの生物観の影響を受けているのであろう。なお、植物には感覚がないという考えは、感覚という語の定義の仕方にもよるのであろうが、現代の植物学では否定されている。植物には、光・接触・重力などに対する感受性があることはよく知られている。Ｐ・サイモンズは、植物生理学の入門書『動く植物―植物生理学入門－』の第１章「神経をもった植物の感じやすい世界」の冒頭で以下のように述べている。少し長いが引用してみよう。

> あなたの庭に、動物ではないが動く生き物がいる。それらは厳密な意味での筋肉はもっていないが、その細胞の内容物は筋タンパク質によって動きまわっている。それらは神経をもっていないが、化学物質、光、接触、重力、温度、湿気、圧力、電気に対する、ときには磁気に対する感覚をもっている。そのうちのあるものは、自らの運動によって動物を捕まえ、それを食べることさえある。それらの生物は植物と呼ばれる。

サイモンズは、光・接触などの感覚を働かせ、電気シグナルを介して運動に転換する方法が植物と動物とで類似していることに基づき、植物と動物との伝統的な差異に疑問を投げかけるだけでなく、人間の神経系や筋系の始原をそこに探ろうとしている。Ｐ・サイモンズ著『動く植物―植物生理学入門－』（柴岡孝雄・西崎雄一郎訳、八坂書房、1996 年）を参照。他にも、山村庄亮・長谷川宏司編著『動く植物―その謎解き―』（大学教育出版、2002 年）、塚谷裕一著『植物のこころ』（岩波新書、2001 年）などを参照。

（８）西村三郎『文明の中の博物学　西洋と日本　上』（1999 年、紀伊國屋書店）46 頁参照。

（９）Ernst Haeckel, *Generelle Morphologie der Organismen, Allgemeine Entwickelungsgeschichte der Organismen*（1866, Berlin, Verlag von Georgreimer）S.300.

（10）注（６）でも述べたが、カントの哲学的思索の中で、目的論的自然観がいかに形成されていったかについては、別の機会に論じたい。

（11）旧約聖書の中で、神は、しばしば「生ける神」と称されている。ヨシュア記３章 10 節、詩編 42 章３節などを参照。聖書は、神が「生命の泉」（詩編 36 章 10 節）であり、その「生命の息吹」（創世記２章７節）によって人間や動物は生きものになるのであり、生命の座は血の中にあると聖書は教えるが（創世記９章４節）、血をもたない植物は、考察の対象から外れている。それゆえ、カントの、生命という観点からの《存在の連鎖》は、ユダヤ・キリスト教の伝統とアリストテレス由来の伝統との融合の上に成り立っていると言うことができるであろう。

（12）《狂気》の区分については、拙論「秘匿された〈まなざし〉――カントの〈狂気〉論――」（『追手門学院大学社会学部紀要　創刊号』、2007 年３月）を参照されたい。

（13）生命という観点からの《存在の連鎖》の問題は、『判断力批判』において、目的論的な《存在の連鎖》の問題として捉え直されることになるが、このことについては別の機会に論じたい。